

編集委員会活動報告

1995年度から、現編集委員会が日本環境教育学会誌「環境教育」を編集してきました。この間受け付けた投稿数、受理した原稿数、掲載した原稿数について年度ごとにまとめたのでここに報告します。

○1995年度（1995.4から1996.3まで）

受付投稿 26（原著16、報告10）

受理原稿 7（原著2、報告5）

掲載原稿 6（原著2、報告4）

○1996年度（1996.4から1997.3まで）

受付投稿 14（原著5、総説1、報告7、
その他1）

受理原稿 12（原著2、報告9、総説1）

掲載原稿 11（原著1、総説1、報告9）

○1997年度（1997.4から1998.3まで）

受付投稿 16（原著7、総説2、報告6、
その他1）

受理原稿 12（原著3、報告8、評論1）

掲載原稿 10（原著3、報告6、評論1）

あとがき

環境教育は社会的要請の大きさの割には、教育現場でなかなか市民権が確立しないという懸念を感じているのは私だけだろうか。学校教育では各教科・領域での実践のほかに、総合学習や野外体験など、環境教育に適した場が提示されつつある。社会教育では伝統的に、地域の環境保護や文化の継承といった分野で、環境教育（環境学習）が盛んに行われてきた。本学会誌にも、ぜひそれらの成果が載ることが期待される。

学会誌というと、アカデミックでなければとか、審査員がいるからとかのせいであろうか、実践報告がなかなか投稿されて来ない。学会運営委員会では、実践報告集のようなものを別途出版してはどうかとの議論もしているが、学会誌とニュースレターの中間的存在として位置づけられるかどうかの詰めがなかなかできない。

編集委員や審査員は、投稿を磨き上げるお手伝い役という役割も担っていると考えれば、少々時間はかかっても、著者と編集委員や審査員の共同作業で論文や報告を仕上げていくスタイルがもっととられてよいと思う。投稿を躊躇している会員は、相談相手として、ときには自分の不足している分野の共同執筆者として、編集委員を積極的に活用してみてほしい。編集委員会事務局としては、そういう相談の窓口としてのアクセスもお待ちしている。

（小川 潔）

投稿論文を受理した通知が届きましたら、印刷原稿にするためにテキストファイルに保存したフロッピーディスクとプリントアウトしたものを一部用意してください。